SIAF LAB.

SIAF LAB. | ANNUAL REPORT | 2015

SAPPORO INTERNATIONAL ART FESTIVAL

はじめに

この報告書には、SIAFラボの初年度の活動が記録されています。

第１回の札幌国際芸術祭2014（略称：SIAF）が閉幕した後、次回３年後の芸術祭、SIAF2017に向けた意識を継続し、じっくり考えてゆく活動をこのSIAFラボは担う事になりました。

芸術祭を考える、芸術祭のために活動するということには無数の方法や可能性がありますが、SIAFラボでは、「面白いものや魅力的なものがこの札幌には溢れている。」そんな意識をみなさんと共有することから活動を始めることにしました。

ラボというと場に付随するイメージを持たれる方もいらっしゃるかも知れませんが、この「SIAFラボ」は場にとらわれることなく、個々の探求心から自由な発想をラボの原動力として、それを共有出来る環境を生み出したいと考えています。その積み重ねを次回の芸術祭に向け、緩やかに繋げていきます。

１年目の活動をご紹介します。

2015年度 SIAFラボの活動

年間シリーズ

- SAPPORO STUDY → p.7
- 見えない展覧会 → p.8
- アート界隈の人々 → p.9
- Bent Icicle Project – Tulala → p.17

2015.7

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- SIAFパブリック・ミーティング → p.5

8

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

- 世界をつなぐ音をつくろう —サウンドプログラミングがつなぐキミと世界 → p.12
- クリエイティブ・コーディング・スクール inさっぽろ2015 → p.13

9

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

- オト・ナ・コード・モ → p.13

10

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

11

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

12

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

- クワクボリョウタ《LOST#13》→ p.16

2016.1

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

- クワクボリョウタ《LOST#13》→ p.16
- クワクボリョウタ《LOST#13》クロージングトーク → p.16

2

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29					

- さっぽろ垂氷まつり → p.18
- 黒田大祐「透明な風景」展 → p.19
- 黒田大祐「透明な風景」展 アーティストトーク → p.19

3

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29				

- 黒田大祐「透明な風景」展 → p.19
- 特別シンポジウム → p.20

SIAFラボとは

札幌国際芸術祭（Sapporo International Art Festival、略称：SIAF）は、3年に1度、札幌市内各所で開催される国際的な芸術祭です。SIAF2017は、ゲストディレクターに大友良英を迎え、「芸術祭ってなんだ？」をテーマに2017年8月6日から10月1日まで57日間にわたり開催されます。

この札幌国際芸術祭の略称を冠したSIAFラボとは、札幌市資料館に開設された「SIAFラウンジ」と「SIAFプロジェクトルーム」の2つのスペースを活動拠点として、札幌らしい芸術祭を実現していくために、市民一人ひとりにとっての「札幌」を考え、発見、発信していくプロジェクトの総称です。さまざまなプロジェクトを通じて、SIAFの活動の担い手となる多彩な人々（アーティスト、キュレーター、研究者、コーディネーター、市民活動団体、ボランティアスタッフなど）を繋ぎ、共に考え、学び合う場として機能することで、札幌市内において主体的、自発的な札幌独自の芸術文化活動が育まれるきっかけを創出します。そして、子どもからお年寄りまで、多くの市民がSIAFに関心を持ち、理解を深めるための「出会い」と「発見」に満ちた場となることを目指します。

SIAFラボ通信

SIAFラボの活動や、アートに関する記事を掲載しているかわら版です。2015年度は2回発行しました。情報発信としての機能に加えて、このかわら版の制作を通してさまざまな人が繋がり、交流の輪が広がっていくことを目指して、今後も引き続き刊行していく予定です。

SIAFラウンジ

札幌市資料館1階にあるSIAFラウンジは、過去のSIAFの記録物や、関連書籍が閲覧できるライブラリーを兼ね備えたインフォメーションセンターとして、芸術祭にまつわる情報の他、芸術文化に関する様々な情報を共有、発信するスペースです。そして、SIAFをはじめ芸術文化に関心のある人々が集う交流の場として機能していくことを目指しています。カフェも併設され、飲食や休憩スペースとしてご利用いただけます。

SIAFプロジェクトルーム

札幌市資料館の2階にあるSIAFプロジェクトルームは、SIAFラボで行われるワークショップやレクチャーなど、ものづくりや学びの場として機能していくことはもちろんのこと、展示空間としても活用されます。

※プログラム実施時のみ開室しています。

ラボの日

特別なテーマやプログラムを設定せずに、年間を通じて、芸術に関する知識を共有する交流会、地元で活動しているアーティストを迎えてのトークイベントを開催したほか、カフェで提供しているスコーンの失敗作から新商品を開発するなど、小さなプログラムを積み重ねました。

2015年度 活動一覧

7.16　福田はじめラウンジトーク
ドイツと札幌を拠点に活動する音楽家、福田はじめさんをお招きし、ざっくばらんなインタビューを開催。後日発行した「SIAFラボ通信（仮）」にインタビューをまとめたものを掲載しました。

7.18　川成（かわなり） 由（ゆう） 原画展
SIAFラウンジスタッフの川成 由がSIAFラボのイベントへ向けて書いたイラストの原画をまとめて展示しました。スコーン用のジャム作りも同時開催。

8.6　しっぱいスコーンを使った新メニューを考えよう！
もったいないプロジェクト第一弾。SIAFラウンジのカフェメニュー、手作りスコーン。焦げたり、形が崩れたりしてしまったスコーンが、サクサクのチョコバーとして生まれ変わりました。

8.8 8.13　コドモのダイガク補講「コンピューターでお絵かき」
SIAFラボメンバー佐藤正範による子どものためのプログラミング講座。アプリケーション「Processing」を使い、コンピューターで絵を描くプログラミングの基本的な仕組みを学びました。

8.15　IAMAS（イアマス）の話
札幌出身で、IAMAS（情報科学芸術大学院大学）に通っているTさんから、どんなことを学んでいるか、学校の様子など、伺いました。

8.20　「大地の芸術祭」報告会 ①
新潟で開催中の「越後妻有 大地の芸術祭」を訪れたSIAFラボメンバー細川麻沙美による報告会。おすすめ名物料理など、現地のフレッシュな情報も。これから観に行くという方の参加もありました。

9.3　「大地の芸術祭」報告会 ②
前回に引き続き、「越後妻有 大地の芸術祭」を訪れたUさんが開いた、報告会第2弾。広大な範囲にわたる芸術祭の見どころに加え、ボランティアスタッフの様子など、生の情報に触れられる報告会となりました。

9.26　「シゲチャンランドと原人祭」報告会
道東津別町にあるアーティスト大西重成さんの個人美術館「シゲチャンランド」。そこで行われた「原人祭」に参加したSIAFラウンジスタッフ小林大賀が報告会を開催しました。

10.18　続 ハンド・メイド・ジョウロ・ボット「自動水やりマシンをつくろう！」
7月に行われたワークショップ（p.5参照）をSIAFラボメンバー船戸大輔の協力のもと再び実施。少年たちが基盤や配線と格闘すること2時間…自動水やりマシンがついに完成しました。

10.24　「すごいぞ、これは！」展プレ・トーク
→p.19参照

10.17～　ツララボミーティング
「Bent Icicle Project - Tulala」（p.17参照）の活動の一環として、毎週土曜日に参加メンバーが集まり、話し合いや実験を行いました。

12.27　ワークショップ「見たあとに書く～批評について考える」
展覧会「クワクボリョウタ《LOST#13》」（p.15参照）関連企画として、現代美術、舞台など芸術分野で作品についての文章を執筆している方々を中心に、「作品を見たあとに、それについて書く」という行為がどんな意味を持つのか、意見を交わしました。

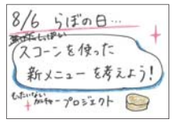
2016

2.19　黒田大祐「透明な風景」展 アーティストトーク → p.19参照
おとどけアート×SIAFラボ企画として開催された展覧会の初日に、出品作家である黒田大祐さんによるトークイベントを開催しました。札幌に滞在中の各国の作家も参加し、インターナショナルな雰囲気の会となりました。

3.12 3.19　黒田大祐「透明な風景」展 ギャラリートーク
SIAFラウンジスタッフによる「透明な風景」展のギャラリートークを2週に渡って実施しました。

3.17　「あいち行ってきました」報告会
あいちトリエンナーレ開催直前に名古屋を訪れたSIAFラボマネージャー斎藤ふみが「アートラボあいち」「港まちボットラックビル」「ボタンギャラリー」など、新しい名古屋のアートスポットを紹介しました。

3.26　ラボの日 総決算！ 今年度の最終回はメディア・アートを考える。
メディア・アートの祭典、アルスエレクトロニカ優秀賞を受賞された久保田晃弘さん（多摩美術大学教授、アーティスト）をゲストに、メディア・アートの話を聞きながら、今年度のSIAFラボの活動を総括しました。



1,2：コラージュ・さっぽろ　3,4：ハンド・メイド・ジョウロ・ボット　5：チラシから見える札幌の「今」　6,7：シェフWatsonと拓く北の味覚　8：これからのSIAFへ向けて

SIAF PUBLIC MEETING

SIAFパブリック・ミーティング

日時：2015年7月4日（土）・5日（日）

SIAFラボの初めてのイベントとして、ワークショップやトークセッション、シンポジウムなどのプログラムを2日間かけて行いました。

WORKSHOP

コラージュ・さっぽろ ― あなたの「札幌」、教えてください！

SIAFラウンジに来場した方それぞれが考える「札幌らしさ」を専用のカードに記入していただき、会場に展示しました。たくさんの「札幌らしさ」が並びました。

TALK SESSION

SAPPORO STUDY part1
― 札幌らしい場所ってどんなところ？ → p.7参照

WORKSHOP

ハンド・メイド・ジョウロ・ボット
― 自動水やりマシンづくり＆プログラミング体験

初心者でも簡単に電子回路を使った作品を作ることができるArduino（アルデュイーノ）という基盤を使って、植物が水を欲しがるタイミングで自動的に水やりを行うマシンを作るワークショップを開催しました。親子連れや大学生、植物を育てるのが趣味の年長者など、様々な年代の方がお気に入りの鉢植えを持ち寄り参加しました。安価で簡単な仕組みの基盤を用いれば、発想次第で様々なものが作れることを体験する機会となりました。時間内に完成しなかった方向けに、「ラボの日」（p.4参照）に「補講」も開催しました。

WORKSHOP

チラシから見える札幌の「今」
― 札幌のアートの「今」を知ろう！

美術館やギャラリー、劇場などの文化施設で手に取ることができるチラシを通し、札幌でいまどのような文化的な活動が行われているのかを探りました。数ヶ月の間に集められたイベントのチラシはかなりの量に。テーブルに広げられたチラシを、参加者はまず、大まかなジャンルに分類。それぞれの分類について改めて並べなおし、比較しました。
音楽ジャンルとして並べたものはクラッシック系とクラブ系が多く、またそれぞれ、チラシのデザインに特徴があることがわかりました。クラッシック系はA4サイズ、片面印刷で、演奏者の写真などを使っているデザインが多く、対してクラブ系は紙のサイズがまちまちで小さめが多く、写真などは使わずグラフィックで作られたものが大半でした。それぞれチラシを手に取る場所、年齢層、音楽の種類による広報方法の違いを想像しつつ、これらのカテゴリーを横断するイベントはあるかなど、話し合われました。
演劇ジャンル、美術ジャンルについても、チラシから感じることを起点に、札幌の芸術文化環境のポテンシャル、それぞれのジャンルがおかれた現状、さらには札幌の文化の中には批評性がほとんどないという視点まで話題が膨らみました。チラシを並べるだけで札幌にまつわる文化的な輪郭を眺めることが出来、多くの議論ができる状況があり、今後も定期的に行ってみてはという意見もでました。

WORKSHOP

シェフ Watson（ワトソン）と拓く北の味覚
― コンピュータと一緒に新しい郷土料理を創ろう！

WatsonはIBMが開発したコンピュータで、2011年にクイズ番組で人間のクイズ王者を破ったコンピュータとして注目を集めました。シェフWatsonは単なる検索ではなく、9000以上のプロが作ったレシピと評価データ、成分データなどから、素材や調理方法も含め思いもよらないレシピを提示してくれます。まずインターネットを通して使えるシェフWatsonの使い方を学び、そして彼が提案する、道産食材を使った2種類のスムージーレシピを実際に調理しました。人間には思いもよらない組み合わせながら、味はまずまず。さらに美味しくするために、参加者が工夫を加えました。新たな食材を使ったスムージーを飲んでみて、その味の違いを楽しみながらコンピュータとの関わりについて考えました。

SYMPOSIUM + PUBLIC MEETING

これからのSIAFへ向けて

札幌国際芸術祭2017へ向けて、3部構成のプログラムを札幌市資料館2階研修室で開催しました。会場はほぼ満席となり、予定の3時間でさまざまな意見が交わされました。
第1部は「SIAF2014を評価する」。札幌国際芸術祭では外部専門家で構成される「SIAF2014事業評価検証会」を発足し、SIAF2014独自の事業評価手法を実行委員会とともに検討、それに基づいて検証を行いました。小田井真美氏（SIAF事業評価検証会札幌調査コーディネーター）の進行のもと、検証会メンバーの熊谷薫氏（デジタルアーカイブ・コーディネーター）と永井希依彦氏（デロイトトーマツコンサルティング合同会社シニアアナリスト）のお二人から、どのような評価手法を取っているかなどの報告と実際に行った評価の例示が行われました。これらの検証結果は報告書という形で公開されました。
第2部は「芸術祭の独自性を考える」。日本国内だけでも数多くの国際展や芸術祭が開催されるようになり、その存在意義や目的も多様化していく中で、どのような独自性があり、SIAFがどうなっていくべきなのか、暮沢剛巳氏（美術評論家）と天野太郎氏（横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員／創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会アドバイザー）をお迎えし、話し合われました。最初に熊谷氏による国内の芸術祭を俯瞰的に見たプレゼンをしていただき、それを受けてお二人それぞれの立場と経験からお話を伺いました。
第3部は「第1回パブリックミーティング―SIAF2017へ向けて」。第2部までとは座席の配置を変えサークル状になり、来場者とともに次回の札幌国際芸術祭について話し合いました。来場者には、第1部、第2部の内容を踏まえ、札幌らしい芸術祭を実現するためのアイデアを、配布した用紙に記入していただき、そのご意見を参考にしながら進行しました。
そもそも「地域性」と「国際性」は両立できるのか、という意見や、ススキノをもっと利用したらどうかなど様々な意見がありました。最後にはSIAF2014の「サッポロ・エホン・カイギ」に参加してくれた小学6年生から次回の芸術祭でやってみたい企画や宣伝方法の提案もありました。

LECTURE

SAPPORO STUDY

モデレーター：
漆 崇博（SIAFラボ マネージャー）

札幌の自然、都市（建築）、歴史、習慣など、人の営みに直結するあらゆる「札幌らしさ」を探る研究会。
それらの要素を各分野の専門家の視点からひも解き、学ぶことで、札幌から生み出される芸術表現や活動の根本を考え、SIAFが目指す、市民自らが自発的に活動する素地と、異分野同士の新たなネットワーク構築を目指しました。

第１回｜札幌らしい場所ってどんなところ？

日時：2015年7月4日（土）16:00 - 18:00
会場：SIAFラウンジ

「札幌らしい場所ってどんなところ？」をテーマに、「場」を通して札幌らしさとはどのようなものかを参加者とともに話し合いました。
参加者には道外出身の方が多く、それぞれの出身地と比べての札幌らしさ、札幌の良さが多く話題にのぼりました。長く札幌に住んでいる方達は今まで考える事のなかった札幌らしさについて思いを巡らせ、当たり前に感じた風景や場所の中に気がつかなかった魅力があることを再認識するなど、１人で考えていては気づかないようなことを発見する機会となりました。

第２回｜石切りが生んだ札幌の「交通」 ― 馬車、市電、そして地下鉄・LRT

日時：2015年9月19日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：札幌LRTの会

「市電を通じて札幌の100年を振り返り100年先を見る。」
札幌市電の成り立ちを振り返り、現状を取り巻く都市交通の変遷を踏まえて、都市におけるそもそもの市電の機能や役割、ループ化に伴って市電がもたらす可能性を専門家と共に検証し、札幌で暮らす人々にとって都市の価値を高める市電の有効な活用方法、都市生活そのものの在り方について考えました。

第３回｜札幌の「四季」― 雪と暮らす街

日時：2015年11月28日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム

SIAFラボがアーティストや研究者など様々な専門家と共同で展開する『Bent Icicle Project - Tulala』の活動報告を出発点として、札幌で活動する「雪ドリ部」や「Sapporo 2 Project」などの除雪や克雪をテーマとした取り組みの実践者とその活動内容を紹介しながら、北海道・札幌特有の冬の暮らしの課題や可能性について考えました。

第４回｜札幌の「出来事」― 例えばサーカスが燃えた日

日時：2016年1月30日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：和田由美（出版「亜璃西社」代表、エッセイスト）

札幌の都市の成り立ちに潜む歴史的な出来事を持ち寄り話し合いました。作家・佐々木譲氏の絵本“サーカスが燃えた日”を出発点として、ゲストの和田由美氏から主に狸小路やススキノ界隈の変遷や、そこで起きたさまざまなエピソードについて解説していただき、参加者と共有しながら、札幌の都市の成り立ちの上でしか起き得ない出来事を探りました。

LECTURE

見えない展覧会

ナビゲーター：
斎藤ふみ（SIAFラボ マネージャー）

1：第１回 魔法をかけて
2：第２回 www_____ jp
3：第４回 Don't Follow the Wind.
4：第５回 わたしたちに許された特別な時間

国内の他の主要都市と比較して、札幌では現代美術の展覧会が少ない傾向にあります。本企画では、そのような中でまずは現代美術に興味をもってもらうきっかけとして、展覧会のように各回にテーマを設け、アーティストや作品を紹介しました。
ナビゲーターがその作品や作家のどの部分をどのようにおもしろいと思ったのか、「作品の見方」の一例を共有することで、アートへの接し方を知ってもらう第一歩としました。

第１回｜魔法をかけて

日時：2015年7月25日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム

海に浮かぶ11の島々を603,870平米の布で包む。蟹の缶詰で宇宙を梱包する。マーライオンと一晩をともにする。サボテンを散髪する。石を石でなくする。「とび丸」くんを召喚する。蝋人形に命を与える。物理的に困難なプロジェクトでは多くの人々の心をひとつにすることで成し遂げ、また、物理的に不可能な事象には私たちの価値観を変えることで乗り越える。人の心に作用する、アーティストそれぞれの「魔法」について、紹介しました。

第２回｜www_____ jp

日時：2015年9月5日（土）14:30 - 16:00
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：馬 定延（ま・じょんよん／メディアアート研究・批評）

「電話網の中の見えないミュージアム」展（1991）、「ネットワークの中のミュージアム」展（1995）、「インターネット アート これから」展（2012）に至るまで、過去の展覧会を切り口にテクノロジー環境によって変化してきた世界認識と表現の関係についてを、馬氏所蔵の貴重な資料も交えて紹介しました。今を生きるアーティストたちは、世界に対する認識をいかに表現に結び付けているのか。さらにその表現はどのように同時代を照らし返しているのかを考えるレクチャーとなりました。本レクチャーは、馬氏が実験的に行っているレクチャーの手法、主にGoogleとYouTube検索で進行されました。

第３回｜Touch my body, and shall we dance?

日時：2015年11月14日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム

あるアーティストは鑑賞者に自分の肉体を傷つけることを許し、またあるアーティストは心臓をコントロールして演奏を行う。あるいは、身体に障がいのある人々を、パフォーマーとして扱うアーティストもいる。自分のからだ、他人のからだ、人工的なからだ、不完全なからだ。からだがなければ見えない、聞こえない、喋れない、触れられない。舞台から路上、バーチャル空間まで、人間の身体をテーマにした作品を紹介しました。

第４回｜Don't Follow the Wind.

日時：2016年1月16日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：窪田研二（キュレーター、筑波大学芸術系准教授）

東京電力福島第一原子力発電所付近の帰還困難区域で開催されている展覧会「Don't Follow the Wind」（以下、DFW）。この展覧会は帰還困難区域の封鎖が解除されるまで、見に行くことができません。同展のキュレーターであり、社会に対して問いを発する展覧会を企画し続けている窪田研二氏に、これまでの活動や、DFWに出展されている作品、設置の際の様子を多くのエピソードを交えてお話しいただき、私たちがいま生きているこの社会でアートが果たす役割について考えました。

第５回｜わたしたちに許された特別な時間

日時：2016年3月26日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFラウンジ
ゲスト：竹内公太（アーティスト）

最終回の第５回は、ゲストにアーティストの竹内公太氏をお迎えしました。震災以降、東京から福島県いわき市に移り住み、制作と発表を続ける竹内氏の「いま」を生きる姿勢、そして「過去」と「未来」への眼差しについて、お話を伺いました。今日に至るまでの竹内氏の作品の変遷を概観しながら、いわき市で現在制作している石碑に関する作品などについてお話しいただきました。

TALK SESSION

アート界隈の人々

モデレーター：
細川 麻沙美
（札幌国際芸術祭事務局 マネージャー）

1：第1回 展覧会エンジニアってなんですか？
2：第2回 コーディネーターってなんですか？
3：第3回 エデュケーターってなんですか？
4：第4回 レジデンスってなんですか？

芸術祭や展覧会では、参加するアーティストや企画を監修するキュレーターには注目が集まります。ですが、一定の期間、芸術表現を紹介するその特殊な現場には、多様な役割があり、専門的な知識と経験を持つ、実にたくさんの人々が関わっています。芸術祭・展覧会は、そういった専門家なくしては実現されません。アートの現場には欠かすことの出来ない、一線で活躍する「アート界隈の人々」をゲストに迎え、その特別な役割から最新の取り組みなどを、対談方式で紹介しました。
この企画は、「見えない展覧会」（p.8参照）と交互に隔月の企画として実施しました。作品を軸に展開する「見えない展覧会」では紹介されることのない、リアルな展覧会現場の方に実際に目の前で話を伺う機会を全4回の「アート界隈の人々」では実現しました。

第1回｜展覧会エンジニアってなんですか？

日時：2015年8月29日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：金築浩史（展覧会エンジニア）
小町谷 圭（メディアアーティスト、札幌大谷大学講師）

メディア・アート作品の展示に欠かせない存在が展覧会エンジニア。この回では、展覧会の制作現場における展覧会エンジニアの役割りや、現場ならではの工夫や技術、そして制作現場の裏話などをご紹介いただきました。

第2回｜コーディネーターってなんですか？

日時：2015年10月3日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：帆足亜紀（アート・コーディネーター、ヨコハマトリエンナーレ組織委員会事務局プロジェクト・マネージャー）
漆 崇博（SIAFラボ マネージャー）

様々な分野に登場するコーディネーターですが、芸術祭や展覧会でのアート・コーディネーターには、どんな役割があるのでしょうか。国際的な現場で活躍する帆足亜紀氏をゲストに、実践的な経験を踏まえたアート・コーディネーターの現在をお話しいただきました。

第3回｜エデュケーターってなんですか？

日時：2015年12月19日（土）15:00 - 16:30
会場：SIAFラウンジ
ゲスト：会田大也（ミュージアムエデュケーター、東京大学GCL育成プログラム特任助教）
佐藤正範（科学技術コミュニケーター、サッポロ・オープン・ラボ、小学校教諭）

学校的な“評価”とは異なる幅広く自由な発想で年齢にあわせたプログラムを開発し、美術館と来場者を繋げる役割を担うミュージアムエデュケーター。この回では、SIAF2014で人気を集めた「コロガル公園 in ネイチャー」の開発者である会田大也氏を迎えてお話を伺いました。

第4回｜レジデンスってなんですか？

日時：2016年3月27日（日）13:00 - 14:30
会場：札幌市資料館 研修室
ゲスト：中村政人（アーティスト、アーツ千代田3331統括ディレクター、東京藝術大学教授）
八巻真哉（京都府文化スポーツ部文化スポーツ総務課国際フォーラム担当）
モデレーター：小田井 真美（さっぽろ天神山アートスタジオプログラム・ディレクター）

最終回は、3名のゲストを迎え「レジデンス」を考える特別版として開催しました。札幌、東京、京都の事例とともに、これからの「レジデンス」を考えました。

SIAF LAB + MEDIA ART

SIAFラボとメディアアート

SIAFラボの「ラボ」には、もともと「実験室」という意味があります。そして実験室で行われる「実験」とは「やってみるまでうまくいくかどうかわからないこと」です。うまくいくことがわかっていたら、それをやる必要はありません。来るべき芸術祭に向けて、いわば社会の底力としての持続的活動を培っていくためのSIAFラボは、札幌市にとってはまだ始まったばかりの、小さなひとつの活動かもしれませんが、その意味と役割はとても重要です。

SIAFラボでこの1年繰り広げられてきたさまざまなプロジェクトは、一見、電子工作やプログラミングといった、新たなテクノロジーに着目しているようにみえます。もちろん、それは確かに、長い技術と社会の歴史からみれば、これまで身近でなかった新しいテクノロジー＝メディアであることには違いありません。とはいえ、それが最先端の技術であるか、というとそんなこともありません。ここで重要なのは、こうした、かつては新しかった特殊なメディアが、安価で使いやすくなることで、パーソナルなものになっていく瞬間です。そこで一体何が起こるのか。それこそが、やってみるまで何が起こるかわからない、まさにSIAFラボが試みる「実験」なのです。

メディアがパーソナルになる、というのはどういうことでしょうか。パーソナルでないメディアは高価で使いにくく、だからどうしても、ある程度の成果が期待できる、少なくともその意味が明確に予測説明できる、保守的な目的のために使われます。「失敗は許されない」と思った瞬間に、それまでの創造力が消え去ってしまうのは、多くの人がしばし経験する失敗です。

実験的精神とは「失敗したら、改良してやりなおせばいい」という姿勢や態度のことです。失敗はもちろん想定内。だからこそ、失敗して改良する時には、いろいろな人にオープンに聞くのがいい。そうすることで、さまざまなバックグランドを持った、異なる人たちとの交流が生まれます。「異をもって尊しとなす」これもまた、実験を行う際の基本的なスピリットです。技術にとっては、技術そのものを発明することよりも、それを発明した人が想像していなかった、新たな使い方を発見することの方が重要です。写真、映像や映画、コンピュータ、ウェブ…いずれも今では、すっかりその表現のフォーマットが固着化してしまいましたが、メディアがパーソナルになりたての黎明期には、さまざまな実験（＝失敗）や文化の交錯が行われました。玉石混交だからいい。だからそこには、今みてもスキルの有無や仕上げの洗練さを超えて伝わってくる、何ものかが感じられるのです。

SIAFラボは、そんなメディアの黎明期に着目しています。電子工作やプログラミングは、今日の実験メディアの一例です。「さっぽろ雪まつり」に関連して取り上げた「つらら」も同様です。まずは「つららは（新しい）メディアである」といってみる。そうすると、目の前にあるつららが、単なるモノを超えて、ふっと何か違うものに見え、違うものとつながっていく。その瞬間を逃さず捕まえることが重要なのです。創造力とは一種の観察力です。多くの人が見過ごしてしまっているものに気づくこと。簡単そうに聞こえるけれど、これが意外と難しい…

芸術は、人を驚かせたり、社会に物議をかもしだすために、奇をてらった何かを仕出かすことではありません。むしろそれは「誰もが使えるもので、人間の想像力や可能性を探求する」ことに近いといえるでしょう。例えば、美術大学の入試科目にある「鉛筆デッサン」は「誰もが手にすることができる鉛筆一本だけで、人はあそこまで描けるようになる」から尊いのです。最先端だったり、限られた人だけしか接することができない特殊なもので芸術を試みようとしても、大概は「試しにやってみた」つまりデモンストレーションのレベルで終わってしまします。芸術とは、身近なものを使って行うさまざまな実験の総称です。だとすれば、その中でも今SIAFラボが試しているような、プログラムコードや電子回路、人工知能やつららまで、それらを新たなメディアとして、市民と一緒にさまざまな実験を継続的に行っていく。それはまさに、今日における「メディアアート」の社会的実践であるといえるでしょう。

未来を考えるために必要なのは、これまで行われた数々の「実験」の歴史とつながっている、あるいはつなげよう、という意識や感覚です。未来は作り出すものというよりも、むしろ過去の中から（再）発見するものです。僕にはSIAFラウンジやプロジェクトルームが、札幌の歴史を伝え、文化財としても貴重な建物である「札幌市資料館」に開設されたことが、何やらとても示唆的に思えてなりません。

久保田 晃弘（多摩美術大学教授／アーティスト）

SIAF LAB PROGRAMMING WORKSHOP

SIAFラボとプログラミング

プログラムとは、「前もって」という意の“pro”と「記述する」という“gram”から成り立っていることからもわかるように、前もって記述され、まだ何が起こるかわからない期待や不安を持ちながら待ちわびる状態のことを示します。良くも悪くもこのプログラムは、私たちの生活を規定するほどに切り離せない環境の一部となってきています。プログラムは言葉の通り、前もって準備され、私たちを暗黙的にコンピュータを使う側に立たせることを強要します。しかし、コーディングのスキルを身につけ、どのような考えでプログラムが準備されているかを読み解くことで養われる、情報モラルのリテラシー教育の重要性や、プログラムを活用した企業の成長見込みによる期待から、初等中等教育段階の早期プログラミング教育の充実を計るために学習指導要領の改訂が急がれています。

芸術の諸分野においても、制作過程の中でコンピュータを活用する機会はますます増えていく傾向にあります。単にプログラミングを覚えるのではなく、プログラムによって詩を書いたり、絵を描いたり、音を奏でたり、来る社会へ向け表現することのできる人材育成が必要不可欠とされています。2000年を境にして芸術系の大学ではデジタル環境を活用した表現を視座に置くコースが全国的に開学し、芸術文化のみならず企業のブランディングや地域振興においてもメディア・アーティストやデザイン・エンジニアの存在は、これまでになく注目されるようになりました。こうした背景の中で、アーティスト自らの表現のために作りだしたプログラミング開発環境をクリエイティブ・コーディング環境と呼び、これらは誰もが創造的な行為のために使うことができるオープンソースのフリーウエアとして、デザインやアートの分野で活用されています。

SIAF2014でもこうしたクリエイティブ・コーディング環境を活用し制作された作品が多く紹介されました。作品がどのように制作されたのか、実践を通して触れてもらう機会として、また制作にこうした環境を活用したいクリエイターを対象に、主要なクリエイティブ・コーディング環境に触れる機会を設けました。

コドモのダイガク 夏の実験

世界をつなぐ音をつくろう

— サウンドプログラミングがつなぐキミと世界

日時：2015年8月1日（土）・2日（日）13:00 - 15:30 / 16:00 - 18:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
講師：佐藤正範（小学校教諭、科学技術コミュニケーター）
船戸大輔（デザイナー、エンジニア、プログラマー）

地理的な枠組みを基本とした共同体とは別に、インターネット上には世界規模で価値を共有し、互いが贈与の関係にあるコミュニティーがあります。そこでは共同で何かを作り上げたり、作品が投稿されたりすることで、創造的な新しいモノやコトが次々と生み出されています。「コドモのダイガク」は、大学などの教育の現場や国内外で活躍するアーティストやデザイナーが用いる“Sonic Pi”というサウンドプログラミング環境を使って、創造的な世界を体験するワークショップです。
参加者は音楽やプログラミングなどに興味をもつ約30人。Sonic Piを扱いながらプログラミングの基本を学び、音楽の専門知識がなくても気軽に旋律やリズムを作って楽しめる事を体験し、全体の活動を通して「プログラミングによる作曲・演奏とコンピュータによる表現」を行いました。
ワークショップの最後には、成果発表としてグループごとに演奏のテーマを決め、合奏に必要なメロディやリズムづくりを分担し、各自が制作したプログラムを合わせ、セッションを楽しみました。全体の活動を通し参加者は、Sonic Piで「プログラミングによる作曲・演奏とコンピュータによる表現を誰でも簡単に楽しむことができ、インターネットを介しコードとしての音楽を容易に共有することができる」事を体感しました。

プログラミング・ワークショップ｜大人編

札幌市立大学 公開講座

CCSS 2015

クリエイティブ・コーディング・スクールinさっぽろ 2015

日時：2015年8月8日（土）・9日（日）・22日（土）・23日（日）
会場：札幌市立大学サテライトキャンパス
講師：杉本達應（札幌市立大学講師）、**藍 圭介**（エンジニア）、
田所 淳（クリエイティブコーダー）、**石田勝也**（札幌市立大学講師）

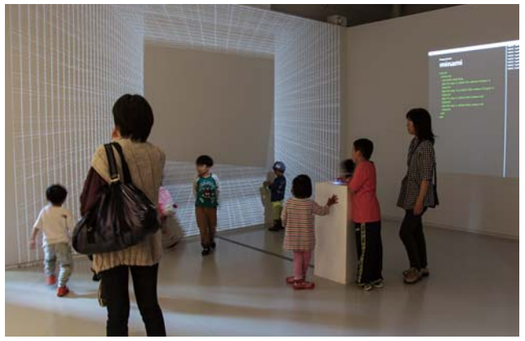
近年コンピュータ技術とその環境の進化によって、様々なプログラミング言語が現れています。特にクリエイティブ・コーディングと呼ばれるプログラムは様々なパフォーマンス、ウェブ、メディア・アートなど表現活動のツールとして多くのアーティストやクリエイターが使用し、その可能性が注目されています。
「クリエイティブ・コーディング・スクール in さっぽろ」は前年から始まった札幌市立大学のワークショップ形式のプログラミング習得講座です。2015年の公開講座では、Processing、JavaScript、Max、openFrameworksの4種のクリエイティブ・コーディングを、実際に動かしながら実践的に学びました。前年は入門編としての講座内容で進めた本講座ですが、本年は入門編の側面を持ちつつも目的を絞って各コーディング独自のアプローチをする内容としました。さらに、講座最終日にはそれぞれの講座を受講した参加者が懇親会で各々の成果を発表したり、交流する機会を設けました。
また、この講座は前述にある「世界をつなぐ音をつくろうーサウンドプログラミングがつなぐキミと世界」（p.12参照）で作られたサウンド・コーディングとの連携を最終目標として、様々なデータのビジュアライズ・コーディングを進める結果となりました。

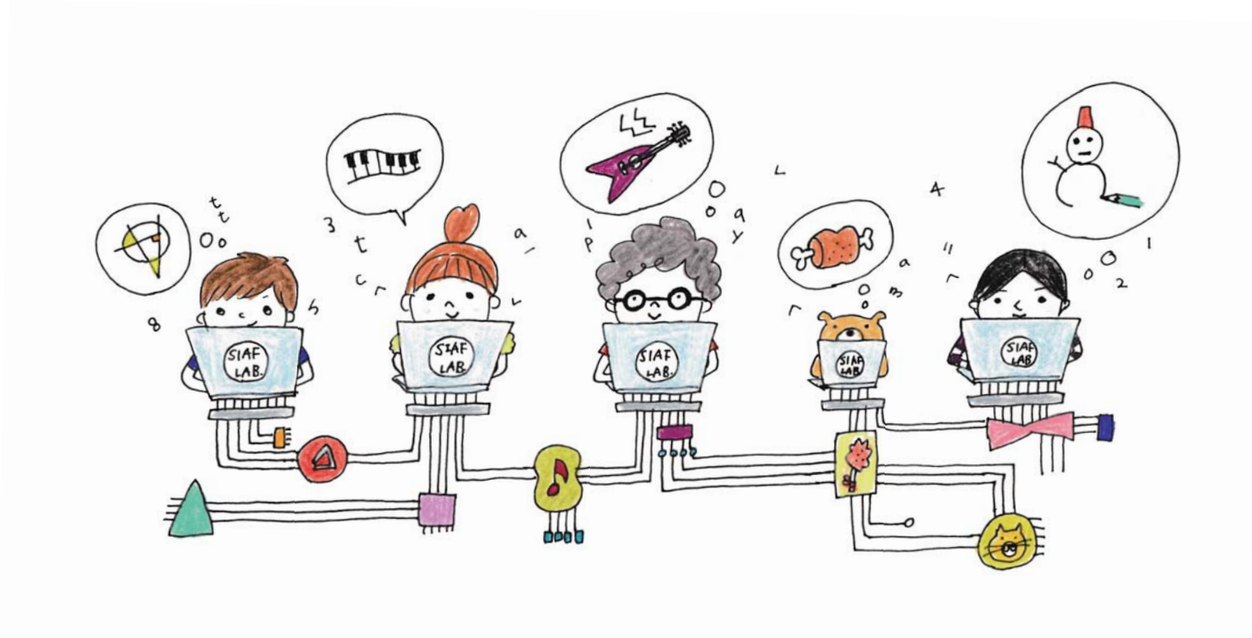
プログラミング・ワークショップ｜子供編・大人編 合同展覧会

オト・ナ・コード・モ

日時：2015年9月21日（月・祝）- 27日（日）10:00 - 19:00
会場：SIAFプロジェクトルーム

子供向けワークショップ「世界をつなぐ音をつくろうーサウンドプログラミングがつなぐキミと世界」と、「クリエイティブ・コーディング・スクール in さっぽろ 2015」の成果発表として行われた展覧会「オト・ナ・コード・モ」。「世界をつなぐ音をつくろうーサウンドプログラミングがつなぐキミと世界」ではSonic Piを使って音作りを、「クリエイティブ・コーディング・スクール in さっぽろ 2015」ではProcessing、JavaScript、Max、openFrameworksの4つのプログラミング言語を用いてビジュアルの制作を行いました。それら2つのワークショップで参加者によって作られた成果物を用いてSIAFラボのプロジェクトメンバーが展示の設計を行いました。
また、オープニングパーティーではSonic PiとギターVJという組み合わせでライブパフォーマンスも披露され、クリエイティブ・コーディングの楽しさを展示とともに表現しました。





Sonic Pi & Haskap Jam Pack

ソニックパイ、ハスカップジャムパックとは

「Sonic Pi」は、これまでのサウンド・プログラミングとは異なり、リズムを止めることなくプログラムを変更しながら演奏することができるライブコーディングという特徴的な機能を持っており、はじめたばかりでもすぐに簡単に演奏ができるユーザーフレンドリーなソフトウエアです。また主要なOS（Windows,Mac）のみならず、安価なコンピュータ"Raspberry Pi"上でも動作することから導入が容易なプログラミング環境であり、海外では初等中等教育でも多く用いられています。残念ながら日本語でのレファレンスは乏しく、日本の教育現場では紹介される機会は多くはありませんでした。この度、SIAFラボでは小学生以上を対象としたワークショップを行うにあたり、レファレンスを日本語化し、ワークショップ終了後にも楽しんでもらえるよう、参加者に配布をしました。

「コドモのダイガク 夏の実験」では、最後にグループごとにテーマに沿った音楽を演奏するためのプログラムを作り、セッションを行いました。セッションが印象深く好評でしたが、Sonic Pi同士をつなげ、プログラムが奏でるリズムを同期させることは本来の機能にはなかったため、SIAFラボでは、セッションを可能にする拡張機能を開発しました。

制作に当たっては、コンピュータを活用した授業を展開する大学の協力を仰ぎ、教材として試験的に利用してもらうことで、フィードバックをもらいながら改善を行うことが出来ました。またワークショップで子ども達が制作したコードによって演奏される音楽と共に、ワークショップ「クリエイティブ・コーディング・スクール in さっぽろ 2015」（以下、CCSS）で作られた映像を同期させるためのプログラムを制作し、コンピュータを利用した体験的な展覧会「オト・ナ・コード・モ」を開催しました。これら一連のプロジェクトによって、昨年、2015年9月にはSonic Piのインターフェース、並びにリファレンスを日本語化。2016年3月には、Sonic Pi同士をつなげてセッションを可能とする機能、さらにその他のクリエイティブ・コーディング環境と連携する機能や、音声合成による歌唱を可能とする機能をまとめ、通常のSonic Piに機能拡張するパッケージ「Haskap Jam Pack」としてHPにて公開しました。

札幌のみならず日本全国でのプログラミング教育で活用できる教材としても提供しています。拡張機能の公開に当たり、大学との連携やCCSSの参加者が開発に加わる等、交流の機会ともなりつつあります。

Haskap Jam Packについては、右記のウェブサイトをご覧ください。→ http://siaf.jp/siaflab/2015/03/29/sonic-pi-x-siaf-lab/

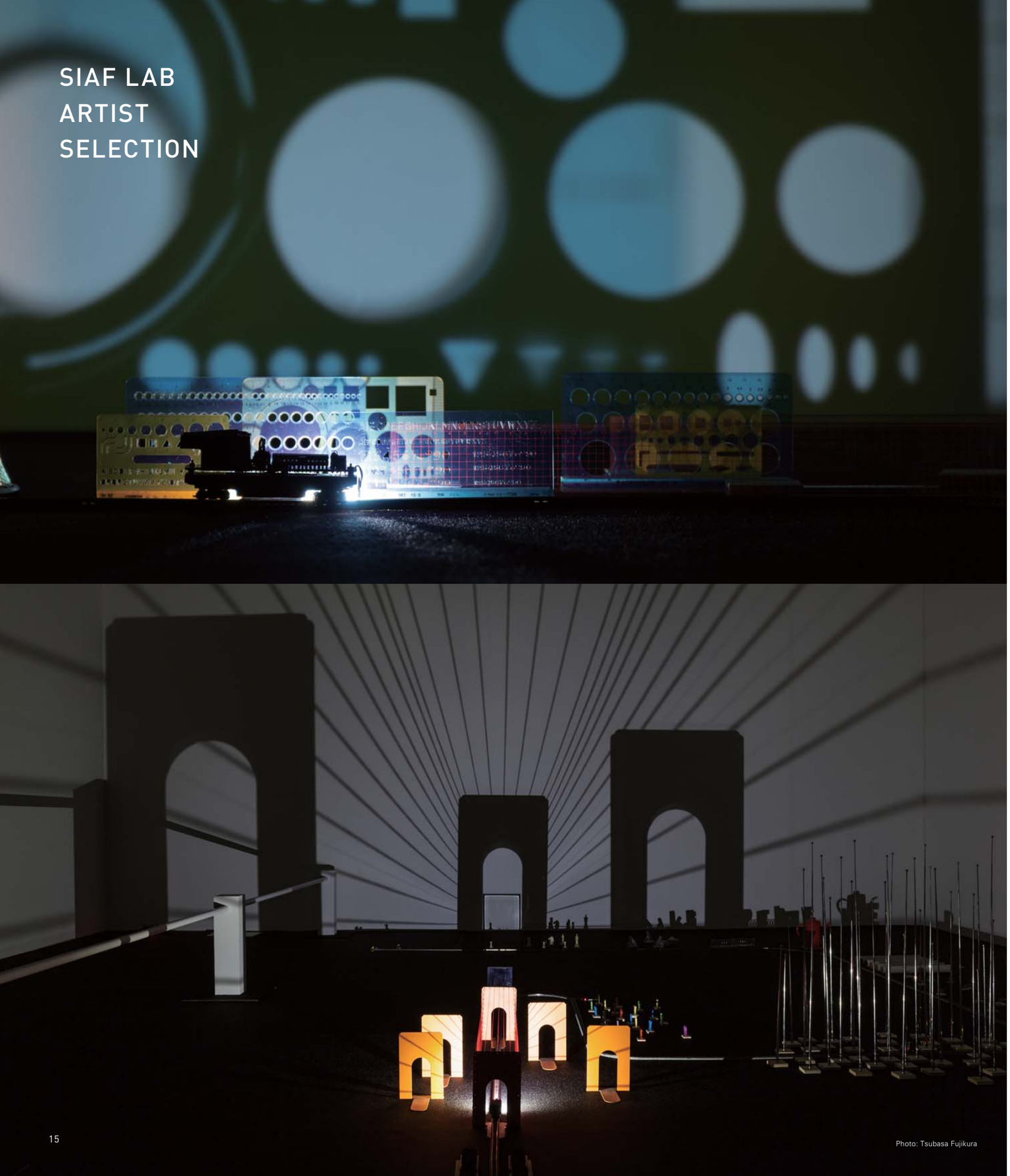


Photo: Tsubasa Fujikura

SIAFラボ　アーティストセレクション

クワクボリョウタ《LOST#13》

日時：2015年12月11日（金）- 2016年1月11日（月・祝）10:00 - 18:00
会場：SIAFプロジェクトルーム

SIAFラボの活動として現代美術やメディア・アートに関する様々なワークショップやレクチャーを継続的に行う中で、実際の「展示」という形でも作品を紹介しました。
クワクボリョウタの《LOST》シリーズは、世界各地で発表され、多くの人々を魅了し続けています。シンプルな機構でありながら深く私たちの情緒に響くこのシリーズの作品《LOST#13》が、札幌で初めて展示され、多くの方々にご来場いただきました。

ワークショップ「批評について考える」

日時：2015年12月27日（日）13:00 - 14:30
会場：SIAFラウンジ

展覧会に並行して、1F SIAFラウンジに「コメントボード」を設置。かわいいイラスト付きの感想から本格的な批評まで、作品をめぐる様々な言葉が寄せられました。また、この日に行われたワークショップでは、アートに関心のある方、ライター、アーティストなどが参加しました。作品を鑑賞し、それを言葉にすることの意味について考えました。

クロージング・トーク

日時：2016年1月11日（月・祝）15:00 - 16:30
会場：札幌市資料館　研修室

出品作家のクワクボリョウタ氏に、ご自身の活動を写真や映像を交えて紹介して頂きました。また、会期中に寄せられた鑑賞者からのコメントを会場で紹介し、作品を通しての作家と鑑賞者、鑑賞者同士のコミュニケーションについて、クワクボ氏と来場者で意見交換が行われました。

BENT ICICLE PROJECT – TULALA

ベント・アイシクル・プロジェクト – ツララ

愛称：ツララボ

大通公園では、年間を通し多くのイベントが開催され、中でも「さっぽろ雪まつり」は、国内外から、およそ200万人もの観光客が訪れる北海道の大規模な文化イベントの一つです。SIAFラボは、この大通公園の西に位置し、1926年に札幌控訴院として建てられ国の登録有形文化財に指定された歴史的建造物「札幌市資料館」を拠点にしています。、この時期にこの場所でSIAFラボが取り組める活動として、年間6mもの降雪がありながら開拓使設置からわずか140年で190万都市に成長した札幌の近代化の流れや、雪氷に覆われる都市の中で生まれてきた独自の文化などをリサーチしながら、新たな札幌の冬の楽しみ方を作っていけるよう、ツララボという毎週土曜日の部活動のような集まりをはじめました。

1953年に制定された「北海道防寒住宅建設等促進法（寒住法）」により、コンクリートブロック造住宅が法的に推奨されたことを契機に、通称「三角屋根」と呼ばれる積立分譲住宅の造成が、札幌への人口の流入により進められました。当時の建築は裏断熱が正しく施工されていなかったため、家の中の熱によって屋根の雪が溶け、それが滴る途中で凍りながら、三角屋根にはたくさんの「つらら」が垂れました。その光景は 高度経済成長期における北海道の景観の一つとなりました。環境によって様々な表情を作る「つらら」は、雪氷害の一つでもある一方、子供達の遊び道具でもあり、寒冷地で暖をとりながら暮らす北海道の象徴的な存在でもありました。札幌市資料館は、古い建造物ですが、現在では屋根につらら防止対策もなされています。また札幌の街中でも断熱性に優れた建築が並び、屋根からつららが垂れ下がる様子は余り見かけなくなった風景でもあります。

冬になるとこの無尽蔵に積もる雪の除雪という不毛な作業によって、文化的な土壌が開拓されない。それ故、雪氷の素性を知ることが豊かな暮らしの支えになるのではないか。そう考え、北海道の近代化や低温科学に大きな業績を残した物理学者の中谷宇吉郎が「札幌国際芸術祭2014」で紹介されたこともあり、雪だけではなく、アイスコアや氷の弾性についても研究をしていた中谷の活動や、中谷の研究を引き継ぐ専門家の話を聞く機会なども設けました。「つらら」が成長し形作られていく様は、たき火を見ているような感覚に近い楽しさがあり、人為的に「つらら」の多様な形の生成過程を楽しむ装置の開発や、溶けて無くなってしまうつららを3Dスキャンし、デザインに活用するなどのアイデアを出しながら実験を行ってきました。これら一連の活動の成果発表として、つららを楽しむ「さっぽろ垂氷まつり」を開催しました。

活動

日時：2015年10月17日 - 2016年3月26日 毎週土曜日
16:00 - 19:00
会場：SIAFラウンジ
プロジェクトリーダー：小町谷 圭（メディアアーティスト、札幌大谷大学講師）、船戸大輔（デザイナー、エンジニア、プログラマー）
コーディネーター：冨田哲司

プロジェクト説明会

日時：2015年10月17日（土）16:00 - 18:30
会場：SIAFプロジェクトルーム
○プロジェクトの説明
講師：小町谷 圭（同上）
○レクチャー「雪や氷の科学」
講師：古川義純（北海道大学 低温科学研究所特任教授）
○レクチャー「かたちをつくる科学〜つららの形態形成を含めて」
講師：小川直久（北海道大学 高等教育支援センター教授）

さっぽろ垂氷（たるひ）まつり

日時：2016年2月2日（火）- 14日（日）10:00 - 18:00
会場：札幌市資料館前庭、SIAFラウンジ、SIAFプロジェクトルーム

2016年2月2日〜14日の約2週間にわたり開催。「小さい頃に様々なつららを集めたワクワク感をもう一度」「溶けないつららがあったら」「食べられるつららをつくりたい」といった参加メンバーの「つらら」に対する自由な発想に、プログラミングやテクノロジーの技術を組み合わせることで、さらなる広がりを持たせる試みとなりました。展示、販売、ワークショップ、トークイベントなど盛りだくさんのプログラムを実施。全体として参加型のものが多く、来場者との交流も多く生まれました。

1

2

3

4

展示・配布

ツララボ活動報告展

初年度のツララボの活動を、写真などで紹介しました。

人工氷柱製造マシン

自然界には存在しない形のつららを冷凍庫内で育てるマシンを開発（現在も進行中）。

つらら新聞

日時：2月2日（火）- 14日（日）10:00 - 18:00
会場：SIAFラウンジ

つららの豆知識などを調べ、新聞を発行。会期中に来場者へ配布しました。

回転式巨大つらら造形マシン（写真1）

日時：2月2日（火）- 14日（日）10:00 - 18:00
会場：札幌市資料館前庭

遠心力で四方に伸びる、巨大つららを造る屋外設置型マシンを制作しました。

制作・販売

つらら型チョコレート（写真2）

日時：2月14日（日）
会場：SIAFラウンジ内カフェ

採取してきたつららを3Dスキャンし、つらら型を作成。つらら型チョコレートを製造し、販売しました。

ワークショップ

Tulala Battle Sapporo －ツララハッカソン2016－

日時：2月6日（土）・7日（日）
会場：札幌市資料館前庭 特設会場

公募により集まった参加チームが、つらら創作バトルを熱く繰り広げました。

日本初？つららスキャンワークショップ

日時：2月11日（木・祝）13:00 - 16:00
会場：SIAFプロジェクトルーム

採取してきたつららを3Dスキャンし、データ化しました。

つららアクセサリーをつくろう！（写真3）

日時：2月13日（土）・14日（日）各日 ①13:00 ②14:30 ③16:00
会場：SIAFラウンジ

採取してきたつららを3Dスキャンし、3Dプリンターでアクセサリーパーツを作成。つららアクセサリーを作るワークショップを開催しました。

トークイベント

つらつら中谷宇吉郎（写真4）

日時：2月13日（土）16:00 - 18:00
会場：SIAFプロジェクトルーム
ゲスト：杉山滋郎（北海道大学理学研究院 物理学部門 量子物理学分野特任教授）

雪の研究者として知られる中谷宇吉郎についてのトークイベントを行いました。

連携企画

札幌芸術の森美術館 ×SIAF ラボ

「すごいぞ、これは!」展 プレトーク

日時：10月24日（土）17:00 - 19:00
会場：SIAFプロジェクトルーム
講師：櫛野展正（くしの のぶまさ）（鞆の津ミュージアム／キュレーター）
聞き手：宮城 加奈子（札幌芸術の森美術館 学芸員）
斎藤ふみ（SIAF ラボ マネージャー）

札幌芸術の森美術館で開催された「すごいぞ、これは！」展のプレトークを、連携企画として開催。「すごいぞ、これは！」展の作家推薦者の１人でもある、「鞆の津ミュージアム」（広島）のキュレーター、櫛野氏をゲストに迎え、障がいのある作家や、専門的な美術教育を受けていない作家たちが生み出す作品を紹介しました。

おとどけアート ×SIAF ラボ

黒田大祐「透明な風景」展

日時：2016年2月19日（金）- 3月21日（月・祝）10:00 - 18:00
会場：SIAFプロジェクトルーム
主催：おとどけアート実行委員会

小学校にアーティストを派遣する「アーティスト・イン・スクール」事業を行っている「おとどけアート実行員会」との連携企画として、今年度札幌市内の小学校に滞在したアーティスト、黒田大祐氏の個展を開催。小学校で制作した作品を再構成し展示しました。

特別シンポジウム

なぜ石は資料館に置かれているのか～《一石を投じる》を巡って

日時：2016年3月27日（日）15:30 - 17:30
会場：札幌市資料館 研修室
アーティスト：島袋道浩（美術家）
ゲスト：村田 真（美術ジャーナリスト）
モデレーター：小田井 真美（さっぽろ天神山アートスタジオ プログラム・ディレクター）

SIAF2014 で展開された作品《一石を投じる》のコンセプト、芸術祭終了後に資料館に移設された経緯などをアーティスト自らが解説しました。今後この作品をどのように展開していくか、議論を深める第一歩となりました。

その他

アートカフェ in 資料館

アートの理解を深めるため、作品やひとつのテーマについてみんなで話し合う場をつくろう！という趣旨で、SIAF2014 ボランティアを中心に始まった、市民による自主的なイベントです。毎回話し合うテーマを提案した人が店長となり、持ち寄った軽食を楽しみながら、アーティストやアートの専門家に限らず、アートに興味のある方なら誰もが交流できる場です。2015年度はSIAFの拠点である札幌市資料館で９回開催されました。2016年度も引き続き開催予定です。

2015年5月31日（日）14:00～
資料館で何をする？

7月19日（日）17:00～
SIAF から生まれたもののこれからについて

8月22日（土）17:00～
境界線ってドコ？

9月30日（水）17:30～
写真の魅力って？

10月17日（土）15:00 ～
アート × ダイアログ × ゲーム

12月26日（土）17:00～
学校の図画工作と美術、とアート

2016年2月11日（木・祝）16:00～
アウトサイダー・アートについて

3月5日（土）14:00～
見える見えない クロストーク in アートカフェ

3月6日（日）14:00～
芸術祭ってなんだ？

おわりに

SIAFラボは、札幌国際芸術祭（以下SIAF）の活動拠点であるSIAFラウンジ及びSIAFプロジェクトルームの開設と合わせてその活動をスタートしました。

活動開始に先立って、私たちは、SIAFという3年に1度開催されるイベントの為の恒常的な活動の場が作られたことを契機に、初回のSIAF2014で見出された数々の課題と向き合う必要がありました。そして、課題をひとつひとつ検証していくと、そこには、「なぜ芸術祭を開催するのか？」「誰のための芸術祭なのか？」「そもそも芸術祭とは何か？」という根本的な問いが生まれてきました。

創造都市さっぽろを象徴する事業としての芸術祭、札幌市の文化政策の位置付けにおける芸術祭、そして札幌市民にとっての芸術祭など、様々な角度から芸術祭の意義を考え、議論しました。結果、私たちが暮らす一人ひとりにとっての「札幌」を捉え直す機会と場を創出することが、SIAFラボに与えられた使命ではないだろうかと考えるに至ったのです。

そうした中で2015年度は、レクチャー、ワークショップ、シンポジウムなど多岐にわたるプログラムが展開されたわけですが、その狙いは、一言で言えば前述の使命を果たすための「思考と体験の場」を生み出す活動であったと考えています。

SIAFラボの取り組みは、これからも市民の方々にとっての、未来の札幌のあるべき姿について考える契機になること、そこで生み出された考え方や開発された仕組みが、未来の札幌を拓く一歩になることを目指していきます。

本書の発行に際しては、ご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、本書を通じてSIAFラボの活動の意義を共有する機会となることを願っています。

編集： 漆 崇博／石田勝也／小町谷 圭／斎藤ふみ
佐藤正範／船戸大輔／細川 麻沙美

川成 由／小林大賀／詫間のり子

協力： ツララボプロジェクトメンバー
札幌市立大学
カジタシノブ

執筆： 久保田 晃弘

デザイン： 白井宏昭

発行: SIAFラボ（札幌国際芸術祭実行委員会事務局）
2016年5月

※文中の肩書は、全て2016年3月現在

助成：文化庁 平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業